
愛美華(まびか)

バンダナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじか
愛美華

【Nコード】

N8042X

【作者名】

バンダナ

【あらすじ】

普通の高校生活をすごしていたたっだあかし竜田証。

ある日突然、謎の美女と出会い、非日常を過すことを決意する。

非日常で何を見るのか？

何と出会うのか？

主人公は最後まで生き残れるのか？

主人公が願うものは？

ジャンル：恋愛バトル物語公開開始：2011年11月7日

プロットを書いていないので矛盾が出る可能あり。
作者は国語が苦手なので、誤字がある。文脈が変。
設定的に18禁（R18）の描写が行われる。

以上の事をふまえた上で、この小説を読んでください。

もし、性描写が行われる場合はサブタイトルに をつけます。
前書きにも注意書きをします。
といっても、激しいものは書くつもりはないです。

朝（前書き）

公開することに後悔なんてない。
洒落ではなくマジで。

作者は大学生なので不定期更新になると思います。

ですが、必ず完結させます（ここ重要）。

朝

6月13日月曜日

ピッピピ、ピッピピ、ピッピピ、カチッ

俺は携帯のアラーム音で目を覚ました。

現在7時30分。学校のSHRが8時30分から。
時間は充分にある。

俺はベッドから立ち上がり、1階のリビングへと向かう。

この家は3階建てで、1階はリビング、キッチン、ダイニングなど、基本的に食事をするためにある。2階は子供部屋。といっても俺だけだ。小さい部屋が4つあるが、すべて空き部屋となっている。

3階は大人部屋。こちらでも2階と状況は変わらない。

1階に降りると、すぐ目の前にはリビング、左にはダイニングとキッチンがある。

イスに座る前に台所に居る母親に「おはよう」と挨拶をする。

「おはよう。すぐに出来るから待っててね」

見ると、料理自体は出来ているが、皿へと盛りつける途中だった。

「手伝うよ」

「じゃあ、これをお願い」

既に盛りつけられた皿を渡された。つまり、俺の仕事は配膳だった。何もしないでいるよりマシだろう。

そう思い、料理が盛りつけられた皿を配膳した。

配膳が終わる頃、父親が1階に下りてきた。

俺たちがいるのを見ると

「2人ともおはよう」

「おはよう、父さん」

「あなた、おはよう」

父は挨拶をすると洗面所へと向かった。いつものヒゲ剃りだろう。

しばらくすると父が戻ってきた。そして、3人で食卓を囲み

『いただきます』

と言って食べ始めた。

朝食はシンプルな物だった。焼き鮭、ほうれん草、味噌汁、ご飯といった和食だ。

「母さん、醤油取って」

「はい」

母から醤油を受け取ると、少々焼き鮭にかけた。

これは醤油の風味を味わうためであり、塩分を過剰摂取することはない。

醤油をぶちまけなければ、だが。

食事がスムーズに進んでいく。

20分もすると、皿の上の物は胃袋へと収まっていた。

「ごちそうさま」

「お粗末さま」

自分の使った食器は、自分で台所へ運ぶ。食器を台所に置いた後は自分の部屋に戻り、制服に着替える。

白のカッターシャツ。ズボンは黒に薄く青いラインが入っている。

最後に黒のネクタイを着けて、着替え終了。

すぐに、カバンに教科書、ノート、筆記用具を入れる。

そして携帯電話を手に取り、時間を確かめる。

8時丁度だ。ここから学校までは徒歩で約20分。

家を出るには丁度良い時間帯だ。

カバンを手に取り、1階の玄関へと向かう。

そこには父がいた。父は靴紐を結んでいる最中だった。

「証、今から出るのか？」

「うん。父さんも？」

「ああ」

父はそんな話をしている間に靴紐を結び終えていた。

「枉（まさ）（母の名前）（じゃあ行ってくる。証、道中気をつけるよ）」

「分かってるよ。父さんも気をつけて」

「正（まさし）（父の名前）（さん、気をつけて）」

父は元気よく家から出ていった。

気づいた人もいるだろうが、俺の家族の名前には必ず

「正」という字が入っている。

だから、近所の人たちは俺たち3人を正家族と呼んでいたりする。まさかぞく

「よし！」

靴紐を結び終えた。そしてカバンを片手に

「いつてきます！」

元気よく、玄関を飛び出した。

朝（後書き）

ラスボスはもう考えています。
ですが、中間のストーリーが穴だらけ。
早く考えないとなあ。

道中（前書き）

11月はテストで忙しいのに、俺は何をしているのだろうか？

道中

俺の住む街は車が少ない。

理由は、徒歩10～15分でコンビニやスーパーに着くからだろう。長い連休でもない限り、走る車が多くなることはない。

歩くこと5分。大きな公園の前を通り過ぎる。

ここには幾つかの思い出があるが、1番は蓮華^{れんげ}という女の子との出会いが印象的だった。

学校に到着するまで時間がある。だから、その話をしよう。

あれは忘れもしない、俺が6歳になった正月のことだ。

俺は、お年玉を貰い舞い上がっていたのだろう。

お年玉を貰ったのが嬉しくて、お年玉片手に家を飛び出した。

そして、この公園に来た。

理由は、ほとんど毎日の様に、幼なじみ2人とここで遊んでいたからだ。

しかし、幼なじみ2人はいない。その代わり、今の俺くらいの歳（18）で、目付きの悪い男が6人いた。

その男たちは、俺を取り囲み

「ボウズ、いいもん持ってんじゃねえか」

「俺たち金に困ってるんだよ」

「だから、それを与えないかなあ？」

俺は、お年玉をくれてやる気にはなれなかった。

逃げたいが、取り囲まれているので無理。

もし、包囲を突破できたとしても、6歳児の足では捕まるのがオチだ。

万事休す。

そのとき

「その子から離れてください」

凜とした声が公園に響いた。声がした方に視線を向けると、そこには竹刀袋を持った、同じ年くらいの女の子がいた。

「おいおい、お嬢ちゃん。『そんな物を女の子が持つちゃいけない』てママに教わらなかったのかな?」

愉快なものでも見たかのように笑う。

「もう1度言います。その子から離れてください」

竹刀袋から竹刀を取りだし、正眼に構える。

離れなければ斬る、ということだろう。

「おいおい、戦う気かよ」

「止めとけ、嬢ちゃん。女が男に勝てるわけないし、そもそも体格が違いすぎる」

男たちの身長は160〜170で、女の子は110程度。

勝てるハズがなかった。

でも、今の俺なら分かる。

最後に言った男の言葉は、死亡フラグや負けフラグ、てやつだ。

「参ります」

勝負は一瞬。あっという間の出来事。男たちは地面に這いつくばり、女の子はかすり傷1つなく立っている。

俺はその光景を理解することが出来なかった。

「外傷は……なさそうですね」

「うん、おかげさまで」

よかった、と女の子は笑った。

「僕は竜田証。君は?」

「如月蓮華きさらぎ れんげです」

蓮華は急に顔を伏せ

「あ、あの!」

「うん?」

「良かったらなんですけど」

「うん」

「抱きしめてくれませんか？」

え？と、一瞬蓮華の言葉を疑った。

「ダメ、でしょうか？」

「いや、全然。助けてくれたし、それくらいなら」

俺は優しく蓮華を抱きしめた。

「良かった。交われた」

ボソッと、蓮華が呟く。

「え？ 何か言った？」

本当は聞こえていたのだが、蓮華に聞いてみた。

「い、いえ。なにも」

そして

「では、縁があればまた会いましょう」

「うん、またね」

俺たちは別れた。

それが蓮華との出会いだった。

今なら分かる。蓮華が公園で男たちを倒したことの異常が。

だからといって、俺は蓮華を怖がったりしない。

何故なら

「あ、おはよう。蓮華」

「お、お、おはよう……ございます。証さん」

可愛くて美人な子に育ってくれたからだ。他に理由があるだろうか？
いや、いない。

何かの縁で、俺たち2人は同じ高校に進学していた。

ついでに、幼なじみ2人も同じ学校だったりする。蓮華と同じクラスにはなれなかったのが残念だ。

如月蓮華は、この街に1つだけある剣道場の娘だ。

幼少の頃から竹刀を振り続けている。

そのおかげで、日頃から会うことは稀だった。

月に多くて8回。少なければ2回程度だ。

だから、蓮華のことを何でも知っている、というわけではない。

高校では女子剣道部に所属している。噂で聞いた話では、今まで蓮華に一本入れた人はいないとか。

性格は真面目。成績は200人中20位と良い。

そのせいで、恐怖や畏怖、憧れや嫉妬など、さまざまな視線が集中する。

だから、蓮華に友だちと呼べる存在はいない。蓮華と仲良くなれば、自分が何かされるのではないか？

そう思っているから、喋りかける人もいない。

それが現実だ。

だが俺は、蓮華と仲良くなりたいと思っている。

そんなことを思考している内に、学校に到着した。

教室前まで互いに無言。

3年2組。

それが蓮華の教室だ。

「何か困ったことがあったら、気軽に相談してくれていいから」

「は、はい。ありがとう、ございます」

俺たちはそう言って別れた。

俺の教室は3つ隣の3年5組。俺の幼なじみ2人も同じ教室だったりする。

「今日も頑張るか」

学校（前書き）

次はキャラクター設定を投稿になる。

学校

「洗脳よりもマインドコントロールの方が質が悪いんだぜ？」

俺は幼なじみである惇^{あつし}に話しかけた。

「朝っぱらからなんなんだよ？」

「それよりもアニメの話しようぜ」

「おい！」

朝から俺たちは仲良しだった。

「そっぴや、義^{ただし}のやつは？」

俺は、もう1人の幼なじみが来てないことに気づいた。

「まだだよ」

そっか、しししトリオは揃っていないのか、と呟く。

しししトリオというのは、俺たち幼なじみ3人の名前の最後が「し」で終わっているのが由来だ。

「それで、どうやったらマインドコントロールが出来るのか？ という話だったかな？」

「全然違うだろ！ アニメの話は何処に行ったんだよ！？」

さあ？と惚けてみせる。

「でも、マインドコントロールにかかりやすいか、かかりにくいかわけ試そう」

まずは手を組む。

次に人差し指だけを立てる。

手のひらはつけたまま、人差し指を出来るだけ離す。

そのままの状態で、人差し指と人差し指の間をジッと見つめる。

そして、自然に人差し指が閉じてくれば、マインドコントロールにかかりやすい体質ということだ。

「で、惇どうだった？」

「人差し指が自然に閉じていったよ」

「ドンマイ」

俺は優しく惇の肩に手を乗せた。

惇は立ち直ると

「マインドコントロールって、日本でも行われるのか？」

「行われるぞ。地下鉄サリン事件を起こしたオーム心理教が有名だな」

海外だと、ヒットラーも使っていたようだけどな。とつけ足した。

「そのマインドコントロールってさ、変な光線浴びせたり、薬を飲ませて人を操るのか？」

「いや、全然。そもそもマインドコントロールって、操られている自覚がないから。操られている自覚があるのなら、それは洗脳だ」
洗脳とマインドコントロールの違い。それは、操られている自覚があるかないか。抵抗可能か不可能か、である。

マインドコントロールは操られている自覚がなく、かつ抵抗不可能である。

何故なら、マインドコントロールは自分の意思で行動しているからである。

自分の意思で行動している限り、その行動に抵抗を持つことはない。

洗脳は自分の意思と反した行動を強制的にやらされる。

だから、操られている自覚があり、抵抗も可能である。

「こえー」

朝のSHRが始まるまでの間、マインドコントロールの話で盛り上がっていた。

そして1時間目の休み時間。

SHRが始まる直前に入ってきた義を交えて話す。

そして、朝の話をすると

「そんなことがあったのかあ」

「マジでこえーよ」

「そんな話するより、アニメの話をしようぜ」

お前が原因だろ！と突っ込まれた。

さて？ 何かしたかな？

「でも、まあそうだな」

「何か話題あるう？」

少し考える素振りをし

「止め絵と呼ばれてるアニメがあるだろ？」

キャラクターに動きがなく、止まって見えるアニメのことだ。

だから、画像数が少ないアニメとも言える。

「俺は思っんだよ」

一息

「動画は、時間を極限まで小さくすると、全部止め絵になるって」

「あつてると言えばあつてるが……なあ？」

「違うと言えなくもないなあ」

「あ、やつぱり？」

切り替えは早かった。

「なら」

「証。時間がないから次の休み時間だなあ」

時間が経つのは早いな、と思った、1時間目の休み時間であった。

2時間目の休み時間。

「自分が好きなアニメOPを言ってくれ。最低2000年代でな。時間制限は3時間目が始まるまで」

幼なじみ2人は「うーん」と悩む。

最初に口を開いたのは惇だった。

「"うたわ。るもの"の夢想歌かな？」

「ああ、いよな。あの曲」

「でも、CDのフルだと、最初の金属音がないからな」

あれがないと、"うた。れるもの"のOPとは言えないよなあ、と言ひ俺は若干落ち込む。

「しかも、原作がエロゲってことで視聴を避けてる人もいるだろうしなあ」

そして、また落ち込んだ。

俺は、エロゲにはストーリー性の物と抜くための物。

この2つが存在していると思ってる。

一般的に想像されやすいと思ってるのは後者である。

「エロ」とつけば、何でも「エロい」と不純だと思ふな。と俺は言いたい。

何も知らない人からすれば、AV風のゲームをプレイしているように思ふのだろう。

しかし、ストーリー性のエロゲのエロはオマケみたいなものだ。

1種の手段でしかない場合だってある。

俺は、エロシーンは毎回飛ばしてるがな！

「ユーフォリック フィールド エブリメント フューチ
「Euphoric FieldやEbullient Futu
reはどうだあ？」

俺は、義の発言で現実に戻ってきた。

「"ef"か。アレはアニメや動画で見なきゃ意味ないだろ」

元はエロゲだし、と呟き

「それに、2期はOPが毎回違ってたしな。6話なんて、歌と人が無くなっただぞ！」

つまり背景と楽器音だけが流れたのだ。

あまりに斬新なOPすぎて、脳裏に焼きついてる。

「それより証はどうなんだよ？」

「俺？ Cath you Cath me？」

惇に向かって言うと

「聞くな！それに、2000年代の曲じゃねえから！それ」
怒られた。ショックを受けるぞ。

「むしろ、2000年に放送された代表的なアニメって何い？」
義が俺に聞いてくる。

「おジ。魔女ど。み#やデジ。ン02かな？」

「おー、そんな時期か」懐かしさに耽った2時間目の休み時間であった。

そして3時間目の休み時間。

「なあ、惇。俺の考えた恋愛小説の設定（女性のみ）を読んでくれ」
俺は惇に1枚のプリントを渡した。

「えーと、何々？」

ヒロインは5人。内、1人は目の見えない女の子。

1人は言葉を喋れない女の子。

1人は音が聞こえない女の子。

1人は1日すると記憶がリセットされる女の子。

1人は感情のない、分からない女の子。

「恋愛が難しいな」

「だよなあ。でも、ちゃんとした内容になれば売れると思うんだよね」

「ああ、それは確かに」

横から出てきた義がプリントを覗き見る。

「でも、こういう場合、それぞれに主人公をつけるか、最初に出会った女の子と恋愛になるよねえ」

「だろうな。それに、全員同じは不可能だろうな。女の子の障害が相性悪い」

例えば、目の見えない女の子と音の聞こえない女の子。

目が見えないから、音に頼るしかない。

音が聞こえないから、視覚に頼るしかない。

あまりにも対称的すぎる。

それこそ先天性視覚障害と聴覚障害なら詰みだ。

後天性なら、ご都合主義でどうにかこうにかなる。

だが、それでは面白さが欠けてしまう。

何かいい手はないのか！？と現在模索中である。

「証って、将来の夢は小説家あ？」

義が聞いてくる。

「いや。思いついたから、書いてみたいなあ、て思ったただだ」それに続き惇が

「それに売れなかったら終わりだしな」

将来のことで悩む3時間目の休みであった。

昼休み

「食堂行こうぜ」

俺が2人に話しかける。

「おう。今日は何を食うか迷うな」

そう言う惇に

「今日も、だろお」

義が突っ込みを入れた。

日本は今日も平和です。

「ふー、食った食った」

「惇は食いすぎなんだよお」

「証の言う通りだよ」

3人で談笑する。

するとそこに

「やあ、証君」

学園1のモテ男、柳扇りゅうせんが3人の女子を連れて、やって来た。

「何だよ？」

「つれないなあ。挨拶をしただけだろ？」

こいつの言うことは無視する。
すると

「ちよつとあんた！柳扇君が話しかけてるのに、何か反応ぐらいしなさいよ！」

柳扇の左にいた女子が怒った。

「無駄だつて。だつてそいつらオタクだもん」

その女子を柳扇の右にいた女子が宥める。

「オタクは誉め言葉だ」

「開き直つてるし。キモいんですけど」

柳扇の後ろにいた女子が言ってくる。

女子は勘違いしてるな。と思い

「1つ教えておいてやる。オタク、と言ってもジャンルは様々だ。

数学、漢字、音楽、武器、アニメ、その他多数」

一息

「オタクを貶すのは自由だが、オタクをバカにするのは止めた方がいい」

柳扇を睨むように見て

「柳扇だつて一種のオタクだ。そうだろ？ 学年1位」

「あんた！！」

柳扇の後ろにいた女子に殴りかかれそうになるが

「止めたまえ。証君の言っていることは事実だよ。僕は勉強が大好きですから」

そう言われて、俺に殴りかかろうとした女子は止められた。

「それより、証君」

「今度はなんだ？」

「女子に興味はあるかい？」

「3次元に興味はねえ」

柳扇は意外そうな顔をして

「如月蓮華さん、だったかな？ 彼女にも？」

「もう1度言つてやる。3次元に興味はねえ」

「ああ、なるほど。興味があるわけだ」

こいつには屁理屈が通用しないなあ。と思いつつ

「疑問が解けたらとつと消える」

「最後に1つだけ」

「？」

「君とはいつかテスト以外で決着をつけよう。学年同列1位」
それだけ言つと柳扇は去つていった。

「つか、証。お前、頭良かったんだなあ」

「義の言つ通りだ。なんで教えてくれないんだよ？」「いや、お前から何にも聞いてこないし、教える必要ないだろ」

「ですよー、と言つ返答が帰ってきたとか、こなかったとか。

「でも、全国模試なら柳扇の方が上だよ」

「関係ないだろ！今度、俺に勉強を教えてくれ。義も頼めよ」

「言われなくても！俺にも頼む！」

はいはい、と適当に返事を返した。

5時間目の休み時間。

「証の勉強方法が聞きたい」

「証の自慰方法が聞きたい」

惇と義の声が重なった。

「惇の勉強方法は良いが、義の自慰方法は勘弁してくれ」

義は驚いた顔をする。 何故？

「わざと声を重ねたのに、よく聞き取れたなあ、と」

ああ、そのことか。と納得する。

「俺の部屋にパソコンがあるのは知ってるだろ？」

「ああ。パソコンが3台並べられていたのを見た時はビックリした

わ。なあ、義」

「うん。アレにはビックリしたよあ。自作だっけえ？」

「おう。1台1万少々の自作パソコンだ」

誇らしげに胸を張った。

「見たいアニメって、いくつかあるだろ？」

「唐突だよなあ。まあ、あるけどお」

義が肯定する。

「そういう時、パソコン3台を起動させて、3つ同時にアニメを見るわけだ」

「内容が頭に入らねえよ！」

惇が突っ込みを入れてくる。

「いや、そうでもない。初めてやった時は、アニメの内容が頭に入らなかったが、次第に並列思考が鍛えられ、今では問題ない」

並列思考というのは、違う物事を同時に処理する能力のことだ。

例えば、アニメの事を考えながら、ラノベの事を考えるなど。

「授業中に黒板に書かれる事や、先生が言う事を、好きなアニメに書き換えて脳内再生する。これでバッチリ覚えられるぜ！」

「義、俺には無理そうだ」

「奇遇だな惇。俺も丁度そう思っていたところだあ」

現実 is 厳しかった。

放課後。

学校の校門に向かうと、1人の女子がいた。

「あ、あの！」

「うん？」

「竜田証君、ですか？」

「ああ、俺だな」

女子は俺の左右を伺う。

「2人には聞かれたくない内容か？」

「い、いえ」

大きく息を吸い、吐く。

「私、理恵と言います」

「理恵さん、ね」

「それで、ですね」

もう1度大きく息を吸い、吐き出した。

「私、証君の事が好きです！付き合ってください」

「ごめん。俺、3次元には興味ないんだ」

彼女はそれを聞いた瞬間、泣き出して走り去っていった。

「悖、知ってるう？」

「何を？」

「証で、モテるんだよお」

「知ってるよ。今みたいなのをさんざん見てきたからな」

「外見はイケメンだけど、中身が残念だからねえ」

後ろで2人が何か言っているようだが気にしない。

「3次元に”全く”興味がないわけじゃないんだけどなあ」

ボソリと呟いた。

学校（後書き）

微積分の中間テストが終わったよ。

やったね！

嬉しさのあまり、衝動で投稿した。

さて、来週の電気回路の中間テストの勉強でもするか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042x/>

愛美華(まびか)

2011年11月9日19時09分発行